



愛妻日記

著：布施はるか

画：黒田晶見

ORC SOFT



ぶちばら文庫

● 登場人物

貞淑な愛妻

能美 早苗

(のうみ さなえ)

上司の紹介で見合い結婚した、圭輔の妻。お嬢様のためかおっとりした性格で、理想的な伴侶となっている。夫の不能にも理解を示していたが、意外にも圭輔の計画にそって、大胆に性を解放してゆく。

プロローグ	愛妻	3
第一章	愛すればこそ	14
第二章	妻の変貌	79
第三章	日々過ぎて	140
第四章	記された想い	194
エピローグ	日記	250

「フエ、フエラ？ な……、なんですか？」

真面目な口調で問われた宮越は、一瞬「え？」と目を丸くし、次いで苦笑する。

「はは。驚いた。(フエラ)って言葉も知らないんだ。こりゃ課長もインポになるわけだ」「知りません……。そんな、そんな変な言葉……。だって、圭輔さんは……。教えてくれませんでしたから」

早苗は思わず、そう反論した。彼女の言葉に偽りは無い。箱入り娘として育てられ、猥談に加わったことも耳を傾けたこともない。それは結婚してからと同じで、夫の圭輔とさえもセックスのスタイルについてあれこれ会話を交わしたこともない。けれども……。

自分の無知が夫を不能にした。宮越の言葉が早苗の胸を貫いていた。考えてみれば、圭輔とはインポの原因について話し合ったこともない。互いに、話題にすることを避けてきた。夫婦なのに……。夫婦だから……。いつの日か愛がすべてを解決してくれる。身体は繋がらずとも心は常に繋がっている。そう言い訳をして、意識して話題を避けていた。だがしかし、本当にそれで済むことなのか……？

動揺する早苗の顔を見下ろし、宮越が口もとを卑猥に歪める。

「なら、俺が教えてあげますよ。早苗さんが課長の力になれるようにね」

「え……？ 圭輔さんの……力に……？」

早苗はハツとした。愛する夫の力になれる。その言葉に思わず縋ってしまう。

「それで……、あの、な、何をすれば？」

「まずは、握ってるチ×ポの先、舌でペロペロ舐めて下さい」

ニヤニヤ笑う宮越の言葉に、早苗はカッと頬を染めた。

「なっ!? そんなことできませんっ! そんな穢らわしいコト……。い、嫌……です」

グロテスクな形をした肉塊は、生殖だけでなく排泄のための器官でもある。実際、シャワーも浴びずに披露された陰茎の先からは、かすかなアンモニア臭がした。それを舐めろというのだから、セックスに疎い早苗が「穢らわしい」と思うのも当然である。もつとも宮越は、早苗の反応を容易に予想できたので、すぐにわざとらしくかぶりを振った。

「あーあ。フエラもしてくれない奥さんか……。課長が浮気したら、知らない女にペロペロ舐めてもらってくるんだろなあ」

「え……？ まさか……。圭輔さんに限って！ 浮気なんてしません。あり得ませんっ」

「それはどうかなあ？ フエラもできないような潔癖症の奥さんなんて、俺だったらゴミンですね」

「う……。でも……。舐めるなんて……」

「課長をほかの女に盗られてもいいんですか？」

宮越が言葉巧みに早苗を煽る。対する早苗は、握ったままの肉棒を見つめる瞳を嫌悪とためらいに揺らしていた。

「あ……、う。わ……、わたしは……、圭輔さんの……つ、妻だから……、だから……」
 掠れた声に早苗の葛藤が如実に現れている。そうして、ついに早苗は肉棒の先端に恐る恐る唇を近づけた。

「う……。んあ、あ……。レロッ」

身を震わせながら、朱唇をゆつくりと開いた早苗は、赤黒い亀頭をペロリと舐める。

「ううっ。くう……。う……」

舌先にまといつく強烈な牡の味とにおい。早苗はギュッと眉間に皺を寄せた。けれど宮越は容赦がない。軽く腰を突き上げて催促する。

「一度舐めて終わりじゃないですよ？ ほら、もっと舐めて。ペロペロと」

「は、はい……。うう、ああ……。レロッ。うっ。レロレロ……。んっ。レロン、んっ」

早苗は嫌悪に満ちた表情を露わにしつつ、それでも舌を繰りだして怒張の先端をペロペロと舐め始めた。

「ううっ。レロン……。んっ。レロッ。チュレロ……。ケホ、ケホッ。う、うう……」

熱気が増し、ムツとするほどの牡の臭気が立ち昇る。早苗は舌を動かしながら何度も噎せ、嘔吐いた。嫌悪の表情に苦悶のそれが加わった。

「その顔がよくないなあ。課長にもそんな顔するんですか？ あなたのチ×ポなんて汚くて舐められないって顔」

「そんな……。わたし……。こんなコト……。するの……は、初めてなんですから……」

ぎこちない舌奉仕で口もとを唾液塗れにする早苗は、涙目になって宮越を見上げる。一方、女性経験の豊富な宮越は、ウブすぎる人妻に苛立つこともなく、励ますように言う。

「課長を悦ばせたいんですよ？ だったらもっといやらしい顔にならないと」

「え？ い、いやらしい顔……。なんて……。わたし、知りません……」

「言ったでしょ？ 自分で自分を貶めるんです。わたしは喜んでチ×ポを舐めるようなはしたない女ですって。男はそういうのに興奮するんです。さあ」

「うう……。わかり、ました……」

早苗は渋々頷き、夫のためと自分に言い聞かせて行為を再開させた。

「レロッ、レロ……。わ、わたしは……。オチ×チンを……舐めるような……。はしたない……。女です……。レロ、レロレロッ」

「その調子。もっと舐めて」

「は、はい……。んっ。レロ……。うっ。ケホ……。んレロッ、レロ……。うう。レロン、ペロペロ……。んっ。レロ……。レロレロ……。んんっ。ンレロ……。レロレロオ」

夫のために、夫ではない男の亀頭に舌奉仕を続ける早苗。いつしか彼女の表情に、宮越が望むいやらしさが滲みだしてくる。それは、未だかつて、夫である圭輔にも見せたことのない媚びた牝の表情であった。

「いいですよ。じゃあ、今度は先っぽ啜えて下さい」

「なっ!? く、口に……入れるんですか? そんなコトまで……?」

信じられないといった様子で早苗が宮越を振り仰ぐ。早苗の顔は狼狽に歪んでいた。

「今の〈舐める〉なんて初歩の初歩ですよ。イイ女だったら言われなくてもチ×ポ啜えるけどなあ」

「う……。わかりました。やりますから……」

早苗は観念したように呟き、意を決して亀頭を口に含む。

「んああ、ああ……。カプ……。うう……。んぐ。えぶっ」

ただ舐めていた時とは比べものにならない嫌悪が早苗を襲った。背中が戦慄き震え、胃がムカつく。込み上げる嘔吐感に喉奥が音を立てる。その拍子に、宮越の手が早苗の頭を軽く押さえつけた。



「フフ……。吐いちやダメですよ？」

「うぐ……。わ、わかつれ……。いまふ……。うう……」

早苗は亀頭を口に含んだまま、涙をポロポロと流して頷く。口腔内の異物を押し込めようとする唾液が口の端から溢れ、顎を伝ってトイレの床にダラダラと垂れ落ちた。

「んぷ……。うん……。ほ、ほれれ……。ろうすれば……。ううっ、いいんれふか？」

くぐもった声で尋ねる早苗に、宮越がサディステックな笑みを送る。

「どうすればいいと思います？」

「ほ……。ほれは……。うう……。ひ、舌で……。舐めふの？」

「正解です。じゃあ、舐めて」

性の教師にでもなったつもりなのか、宮越は早苗の頭を撫でながらそう告げた。

「ふ、ふあい……。んっ。ブ、ジュブ……。んっ。レロオ……。ケホ……。ケホッ。レロレロオ……。うう……。んっ。プ……。う……。ジュレオ……」

肉棒を咥えた朱唇の隙間から息を洩らし、早苗が窮屈に舌を動かして亀頭を舐める。苦悶にも似た表情を浮かべ、涙を流し、おぞましい異物にレロレロと舌を這わせていく。

「う……。ペロ……。ペロペロ……。くっ。えぼっ。うう……。ヂュル、レロレロ」

「ああ。課長がさせたことのない早苗さんのフェラチオ、堪能してるんだよなあ」

どこか芝居がかった口調で宮越がひとりごちた。わざとらしいそのセリフは、目の前に

いる早苗だけでなく、あとで隠しカメラで撮影された映像を観るであろう圭輔にも聞こえるように敢えて言ったのだ。そうとは知らない早苗はビクリと身を竦ませ、ともすれば口から吐きだしそうになる亀頭を咥えたまま、哀願の眼差しを宮越に向ける。

「う……。んぷ……。んっ。そんなころ……。うう、言わないいくらにはひ……。うう……。

お願い、やめれえ」

「いや本当、課長に申し訳ないですよ……。ああ。でも、早苗さんの初フェラ、すげえ気持ちいいな」

応じる宮越の声は、少しも申し訳なさそうでない。むしろ、早苗の拙い奉仕を堪能し、美しい人妻の口処女を奪ったという邪な喜びに興奮していた。だがしかし、邪な感情に興奮しているのは宮越だけだろうか？ 早苗の胸の内にも背徳の悦びが頭をもたげ始めてはいまいか？ その証拠とも思える言葉を、早苗は思わず口にしていた。

「そう……。れふか……。ありがろう……。ごらいまふ……。レロ……。んっ。レロレロ……。んぷ。レロッ」

熱く湿ったくぐもった呻き。舌が亀頭に絡みつく粘着音。形のよい顎を伝い落ちていく唾液の雫。それらが早苗の理性を性の興奮に狂わせていく。もっとも、初めての行為に肉体のほうに先に悲鳴をあげはじめた。慣れない口淫を続ける中、顎や舌に疲労が溜まる。

「ん……。んぷ……。あ、あの……。わたひう……。いつまれ……。続けければ……。いい

んれふか?」

「いつまで? そりや、俺がいくまで……、あつ!」

言いかけた宮越が不意に情けない声を洩らす。

「やつべ。早苗さんのフェラ顔、エロすぎて、もうイきそうだ」

「え……? イくつれ……? い、嫌……。ちよつろ待つれ……、んうふうっ!」

言葉の意味を悟った早苗は、おぞましい結末を想像して反射的に抵抗しようとした。けれど宮越は、早苗の頭を両手で押さえつけ、高まった興奮をそのまま吐きだす。

「おおっ! やつべ、出る……!」

「んごおっ!! うぐうっ!」

宮越の腰がヒクつくたび、熱い精の迸りが早苗の口腔にビュクビュクと噴出した。

「ぐむぐう……。ううっ。や、やべで……、おぼっ。く、口から……出ひて……!」

驚愕と嫌悪に目を見開く早苗が、射精中の肉棒を吐きだそうともがく。宮越はそれを許さず、早苗の頭をガッシリと掴んで、濃厚な牡汁を立て続けに放った。

「受け止めて飲むんですよ、早苗さん。それが作法だ……。おおっ。すげえ出る」

「ゴボツ。無理……です……!」 ゲボツ。死んじやう……! ゲボツ。おぐっ! プビュビュ……。ぶっ。おぶうっ! うううっ!!

男性を口に含んだのも、口内射精をされたのも生まれて初めての早苗が、放たれた精液

を飲み込めるはずもない。早苗は何度も嘔吐き、脈打つ陰茎を唾えた口から酷く生臭い粘液をポビュポビュと吐きだした。大量の白濁汁が床の上にボタボタと落ちる。やがて、ひとしきり射精を続けたあと、宮越はブルツと満足そうに腰を震わせた。

「ふう……。出た出た……。あーあ。こんなにこぼして。なんで飲まなかったんです?」

射精を終えた宮越が、早苗の頭から手を離し、力を失ったペニスを人妻の口から引き抜く。ようやく悪夢のような行為から解放された早苗は、口からは精液と涎の混合粘液を、瞳からは屈辱の涙を流して床に蹲った。

「酷い……。ゲホッ。うう……。飲めるわけ……。ありません……。え、えうっ!」

「いくらトイレでも、こんなにザーメンのおいがしたら、課長にバレちゃうんじゃないかな



ぶちばら文庫
愛妻日記 (あいさいにつき)

2010年 12月23日 初版第1刷 発行

■著 者 布施はるか
 ■イラスト 黒田晶見
 ■原 作 ORCSOFT

発行人：久保田裕
 発行元：株式会社パラダイム
 〒166-0011
 東京都杉並区梅里2-40-19
 ワールドビル202
 TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、
 かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©HARUKA FUSE ©ORCSOFT

Printed in Japan 2010

PP008



ぶちばら文庫06
 夜空野ねこ 著
 refeia 画
 あるてみす。原作
 定価 670円(税込)

あいすのっ!
 When thinking the end, no...

1月上旬 発売予定